

だからアメリカは嫌われる

盛田 常夫

とうとうアメリカの対イラク攻撃が始まった。「外交努力が結ばなかった」というが、アメリカのいう「外交努力」とは政策の支持を取り付けるという意味でしかない。外交努力が失敗したのは、「フランスやドイツ、ロシアが反対したから」、「フセインが退陣しないから」というが、アメリカの戦争政策が賛同を得られなかったということにすぎない。それなら、攻撃を止めるのか。そうではない。支持があってもなくても攻撃する。支持があれば正当性が裏付けられたのに、というだけの話だ。

それほどまでに支持されないのにどうして攻撃に踏み切るのか。アメリカの身勝手は今になって始まったことではないが、明らかに最初から「開戦ありき」だった。すでに大規模な軍の移動をおこなったアメリカには、いつ戦端を開くか、それだけが問題だった。

派遣した軍は引き戻せない

25万人規模もの軍の駐留を後方支援するのは容易なことではない。まして、砂嵐の季節に入り、時期が遅くなればなるほど、装備の維持管理や兵士の志気の保持が難しくなる。駐留が長引けば長引くほど、戦費もかさむ。巨額の出費をして、無駄に引き返すことはあり得ない。これだけの移動をおこなった時点で、すでに「撤退」の可能性は消滅した。開戦しなければ、派遣した意味がない。開戦は早ければ早いほど良い。1カ月の査察延長ですら論外なのだ。まして、3カ月の延長など、話にならない。

それにしても、支持を取り付けようと頑張ったことで、開戦が1カ月以上も延びた。これはアメリカにとって、耐え難い時間の浪費で、誤算だった。短期に支持が得られないなら、もう妥協の余地はない。可及的速やかな開戦以外に、道は残されていない。国際社会がどう判断しようが、これがアメリカの論理だ。まさに、軍の事情から、開戦が選択された。国連や国際法の論理などは二の次だった。

無理が通れば道理が引っ込む

アメリカはベトナム戦争で戦後最大の過ちを犯したが、今またイラク開戦で、歴史に記録される過ちを犯している。いかにフセインが悪者でも、すでに国連制裁で疲弊し、核兵器の開発を絶たれているイラクにたいして、「生物化学兵器を隠しているだろう」と、武力装備に天と地ほどの差がある国が、大規模空爆で攻撃することが許されるだろうか。力のある者が、力を見せびらかして、ねじ伏せる。国際法の論理を無視して、辣腕を見せつける。そのような光景を見せつけられて、誰が喝采し、誰が悲しむのだろうか。力を持つ者が謙虚でなければ、社会や世界は荒む。過剰な武力の行使は、必ず反発を生む。無理が通

れば、道理が引っ込む。「俺は正義の無理を使うが、君たち不正義の輩は道理に従いなさい」などと説教できるだろうか。無理には無理が、道理には道理が随伴する。テロが常態化したら、ブッシュやブレアが責任を取れるのか。イラク攻撃が効果的でなければ、ブレアは首相を辞任するというが、そんなことで済むはずがない。

アメリカは共産主義者のアジア支配の脅威から守るためと称し、南ベトナムの独裁腐敗政権を支え、南ベトナム解放戦線を「ベトコン」(ベトナム・コミュニスト)と蔑称して、戦線を開いた。ジャングルに囲まれた立地にてこずり、北ベトナムにまで戦線を拡大しつつ、ベトナムのジャングルを焼き払う作戦に出た。ベトナム全土を焼き尽くし、ベトナム人を百万人も殺戮しながら、ベトナムを撤退せざるを得なかった。5万人の兵士の犠牲を払ったベトナム戦争は、アメリカに大きなショックを与えたが、30年の時間の経過は歴史を忘れさせるに十分な時間だった。

もっとも、中東は砂漠だから、ベトナムのような間違いを起こさないだろうし、最新兵器を用いた大規模空爆で兵士の犠牲を最小限にして勝利できるという確信はあるだろう。しかし、自分勝手な論理にもとづく行動様式には何の変化もない。アメリカはベトナム戦争で辛酸をなめたが、ベトナムにたいしては一言の謝罪もしていない。戦後最大の戦争犯罪であるベトナム戦争にたいして、日本は当然のようにアメリカを全面支持し、米軍の後方支援をおこなった。共犯行為を犯した日本もまた、ベトナムにたいして謝罪していない。それを忘れてはならない。

アメリカ支援 30 カ国

アメリカは開戦にあたり、アメリカを支持する 30 カ国のリストを発表した。30 カ国のうち、いわゆる西側と分類できる文明国は 10 カ国にも満たない。残りは、旧社会主義国 (13 カ国) と中南米、アジアの貧困国だ。アメリカ軍の基地使用を拒否したトルコまでリストに加え、エルトリアなどという聞いたこともない国まで勘定している。それほど動員しなければならないほど、アメリカの政策が支持されていないのだ。

それにしても、旧社会主義国が軒並みアメリカ支持に向かったのはどうしてだろうか。これから NATO に入りたい国がアメリカに媚びを売るのは理解できる。バルト諸国やルーマニアなどは卑屈なほどだ。しかし、理解できないのは、中欧諸国だ。ポーランドはアメリカとの関係が強いから理解できないでもないが、現在の大統領も首相も、旧共産党時代のエリートだ。それが軍隊の派遣まで踏み込んでいる。チェコもスロバキアも、後方要員の派遣を決定した。ハンガリーも、タサール基地でのイラク反体制グループの訓練を容認し、米軍の輸送の国内通過も航空機の領空通過も容認した。国連のみならず、NATO の決議にすらもとづいていない開戦に協力する義務はないはずだが、どの政府も最初から過剰なほどの全面協力の姿勢なのだ。この卑屈さはどこから来るのだろうか。

要するに、これらの指導者には自ら拠って立つ哲学がないのだ。その場しのぎの日和見主義なのだ。社会主義であれ、資本主義であれば、状況でどうにでも変わる。そういう御

仁が政権の中枢にいるだけなのだ。ちなみに、スロベニアだけは国連決議にもとづかない米軍の軍事行動には協力しない姿勢を明確にしている。

コヴァチ外務大臣はタサルでは民間人を訓練しているだけで、ハンガリーは軍隊を派遣しないから、戦争側についているという FIDESZ の主張は誤りだという。幼稚な議論だ。FIDESZ もはっきりしない。領空通過の協議には、予定が合わなかったという理由で参加しなかった。判断を回避したのだ。明確に反対したのは MDF だけだ。後になって分かったことだが、領空通過の許可を得るまでもなく、すでに米軍は 200 回以上に渡って、領空を通過していることが報道された。日和見主義政治家の足下が見透かされている。

(2003 年 3 月)